

川宿

〔古事記〕故其伊邪那岐大神者坐淡海之多賀也。

〔古事記傳〕多賀式に近江國犬上郡多何神社二座と見ゆ、和名抄に田可郷あり、是なるべし。

〔日本書紀〕神功三月元攝政忍熊王逃無所入、則喚五十狹茅宿禰略。中則共沈瀨田濟而死之、于時武

內宿禰歌之曰、阿布彌能彌齊多能和多利珥伽豆區苦利梅現志彌曳泥麼異枳迺倍呂之茂、於是探

其屍而不得也、然後數日之、出於菟道阿武內宿禰亦歌曰、阿布彌能彌齊多能和多利珥介豆區苦利

多那伽彌須疑氏于泥珥等邏倍菟。

〔日本書紀〕天武二十八元年七月辛亥、男依等到瀨田。

〔類聚名物考〕地理三大津里。おほつのさと。近江國滋賀郡宮濱等をよめり。

〔和漢三才圖會〕近江七十一大津至京師三里至膳所一里、子丑至越前、敦賀二十三里、北至海津、舟十六里。

〔近江國輿地志略〕志賀郡大津。志賀郡の塊區にあり、日本廣邑三十六のその一にして、近江二湊

の第一たり。大津八幡を當國抑この地を大津と名づくることは、古事記に據る、はじめは相津な

り、古事記の崇神記曰、故大毘古命者、隨先命而罷行高志國、爾自東方所遣建沼河別、與其父大毘古

共往、遇相津、故其地謂相津也、伊勢延佳神主云、相津は近江國志賀郡、いまの大津の事なりと。略中

大津相津訓近きを以て改め給ふなるべし、其後天武大友の壬申亂より、大津の都あはれて、古

都となりしかば、自古津とはいへり、古都をこつと訓す、古津またこつとよめり、續日本紀曰、聖武天皇天平十二年十二

月癸亥、到志賀郡木津頓宮云々。木津又こつと訓す、古つと同、その後大津と改りしことは、桓武天皇の朝なり、日

本紀略曰、延曆十三年十一月丁丑、詔曰、近江國滋賀郡古津先帝舊都、今接輦下、可追昔號、改稱大津

云々、桓武帝及嵯峨帝この蹟に行幸をなしたまへり、日本後紀曰、延曆二十年三月幸近江大津國

司司奏歌儼、近行宮諸寺施綿類聚國史曰、大同二年十月乙亥、行幸近江國大津、修禊、以御大嘗也、こ